

COLING2012 参加報告 (その1)

— 概要 —

飯田 龍[†]

1 はじめに

本稿では、2012年12月8日～15日にインド・ムンバイで開催された国際会議 24th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2012) について報告する。特に、会議の概要（採択率、参加者数、論文のトピックの分布）について報告するため、個別の話題については他の報告者の紹介を参照されたい。

2 投稿数と採択率

(Bhattacharyya 2012) にまとめられているように、COLING 2012 には1,000件を越える論文の投稿があり¹、約30%の採択率で論文が採択された²。これまでに開催されたCOLINGのうち、採択率の情報が参照可能なものを表1にまとめる³。この表からわかるように、2010年の北京開催の例外的な採択率を除き、今回の採択率は平均的な採択率だといえる⁴。投稿された論文のうち、口頭発表は173件、ポスター発表は138件、デモ発表は66件であった。これに加えリザーブ論文と呼ばれる発表キャンセルの場合に代わりに発表するための論文が22件採択された。

原稿の投稿に関して、今回のCOLINGではいくつかの試みがなされた。一つ目は投稿する論文の形式の変更である。近年のモバイル端末の普及を鑑み、従来のA4の2段組の形式を排除し、B5の1段組で、かつ極力余白を削除した形式を採用した。これにより、例えば、iPadのような情報端末で論文を参照する際に、論文の1ページ全体を拡大することなく読むことが可能

[†]東京工業大学, Tokyo Institute of Technology

¹ただし、1000+という数だけが報告されているだけで、具体的な数については報告されていない。

²この採択率の数字は会議のクロージングの際に公表された数値を掲載しているが、会議のまとめに相当するレポート (Bhattacharyya 2012) からはその情報が削除されている。

³詳しくは http://aclweb.org/aclwiki/index.php?title=Conference_acceptance_rates を参照。

⁴表1の2012年の採択数である399という数は口頭発表173件、ポスター138件、デモ66件、控えの論文(Reserved)22件の合計であるが、会議のページに掲載されている採択リスト <http://www.coling2012-iitb.org/doc/coling2012-final-selection-25oct12.pdf> 内の採択分を数えた結果は367であり、採択件数が一致しない。

表 1 最近の COLING の投稿数の推移

	Submitted	Accepted	Rate
17th COLING 1998	550	137	25%
18th COLING 2000	323	110	34%
21st COLING 2006	630	147	23%
22nd COLING 2008	600	145	24%
23rd COLING 2010	815	334	41%
24th COLING 2012	1000+	399	30%

表 2 国別の参加者数

国籍	参加者数
India	251
United States	70
Japan	58
China	53
Germany	49
France	36
United Kingdom	24
Ireland	17
Australia	14
Others	181
total	753

となった。さらに、従来の英語の論文概要に加え、英語以外の言語によるタイトルと概要を任意で記述可能とした。この意図は、多言語のタイトルと概要を原稿に含めることで、対訳コーパス構築のためのシードとして利用することであるが⁵、この記述は任意であったため、ほとんどの著者が記入しておらず、データの収集という意味では十分な結果が得られたとはいえない。

3 分野と参加者の傾向

まず、会議の参加者の国籍を表 2 にまとめる。この表より、開催国のインドからの参加者が全体の約 3 分の 1 を占めており、次いでアメリカが、さらに 3 番目に日本の参加者が多く、日本人研究者の積極的な COLING への参加の傾向が見られる。ただし、今回は開催国がインドということでそもそもビザが取得できずに参加できない研究者が多数いたことを報告しておきたい。特に顕著なのは会議への参加登録数と実際の参加数の差であり、登録された数が 763 であるのに対し、実際に会議へ参加した研究者は 582 と、全体の約 76% しか参加できていないこと

⁵<http://www.coling2012-iitb.org/faqs/index.php>

表 3 採択された論文の分野ごとの割合

分野	割合
Sentiment and text classification	7%
Resources and annotation	7%
Morphology & POS tagging	6%
Empirical machine translation	6%
Indian language technology	5%
Underresourced languages	5%
Semantics	5%
Summarization	5%
Deployment of NLP-based applicaitons, software integration & quality	5%
Information & content extraction	5%
Parsing	4%
Information retrieval	4%
Discourse and pragmatics	4%
Coreference resolution	4%
Word sense disambiguation	4%
Ontologies and terminology	3%
Named entity recognition	3%
Natural language generation	3%
Expert or hybrid machine transtion	3%
Question answering	3%
Grammar and formalisms	2%
Speech recognition and synthesis	2%
Psychological and neurological modelling	2%
Hybrid man+machine architectures	1%
Textual entailment	1%

がわかる⁶。このため、発表を予定した参加者が来られなかったため、急遽リザーブ論文として採択されていた方が発表することになるという場面が多数見られた。また、急にプログラムが変更になるということが日常的に行われたため、聴講したい発表を聞きに行ったが、その発表がキャンセルされる状況に何度も遭遇した。しかし、逆に会議としての堅苦しさが緩和されたためか、会場に来られない研究者の論文をキャンセルされた発表のセッション中にみんなで議論するというこれまでの会議にない積極的な議論の場ができるなど、運営上の問題を参加者が逆に利用するという興味深い場面も見られた。

次に、会議に採択された 399 件がどの分野の論文として採択されたのかの割合を表 3 にまとめる。ACL や NAACL などのアメリカや中国からの参加者が絶対的に多い会議では、機械翻訳とパーズングのセッションが相対的に多くなるのに対し、この表からわかるように、COLING 2012 では各分野の論文が非常にバランス良く採択されているのがわかる。また、最近の主要な国際会議で採録される論文は、対象とする問題の自動解析の結果を掲載しなければ採択されないという傾向にあるが、COLING2012 ではそのような種類の論文に加え、解くべき問題の定性的・定量的な分析のみを行っている論文や、予備的な実験しかできていないが着眼点が良い内

⁶この数は会議のクロージングで報告された数であるが、(Bhattacharyya 2012) では参加者数は 612 と報告されている。

容も含まれており、発表される内容の種類は多様なものとなっていた⁷。

4 Best Paper Awards

会議の最後に下記の論文がベストペーパーとして表彰された。詳しくは、原氏の「COLING2012 参加報告（その4）」を参照されたい。

Accurate Unbounded Dependency Recovery using Generalized Categorical Grammars,
Luan Nguyen, Marten Van Schijndel and William Schuler.

5 おわりに

本稿では国際会議 COLING 2012 の概要について紹介した。前述のように COLING 2012 では一般的な国際会議とは異なる盛り上がり⁸を見せ、無事会議を終了した。次回の COLING は 2014 年に開催され、開催地はアイルランド・ダブリンである。こちらの会議でも、特にヨーロッパからの投稿が多く期待され、多様な発表の投稿が予想される。前述のように、COLING は議論レベルの内容でも採録される可能性があるため、興味深い話題については深く突き詰める前に投稿することで、その研究の方向性について討議するための良い議論の場となる可能性がある。このため、2年後に向けた日本人研究者の活発な活動を期待したい。

参考文献

Bhattacharyya, P. (2012). “COLING 2012: Some facts and figures.”.
http://www.cflit.iitb.ac.in/documents/COLING_Report.pdf.

略歴

飯田 龍 (正会員)：2007 年 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 博士
後期課程 修了。博士（工学）。奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科
特任助教を経て、現在東京工業大学 大学院情報理工学研究科 助教。自然言
語処理、特に談話処理の研究に従事。情報処理学会、言語処理学会、日本教
育工学会、各会員。

⁷それぞれの詳細については以降の参加報告を参照されたい。

⁸個人的に印象に残ったのは、会場とホテルを往復するバスが乗用車と接触事故を起こし、参加者が小一時間ほどバスに缶詰めにされた場面である。

COLING2012 參加報告

(2012 年 11 月 30 日依頼)

(2013 年 1 月 20 日受付)